2020 年 3 月 5 日放送

印象に残る症例①

冷えで増悪する季肋部痛と漢方

福井大学医学部　麻酔科蘇生科　准教授　　**竹内　健二**

私は長年にわたりペインクリニックにかかわり、様々な痛みを訴えられる患者さんを多く診療させていただきました。以前にくらべて痛みに対する多くの新薬が市場に出回っていますが、そのような新薬をもってしても対処が困難な痛みの患者さんがたくさんいらっしゃいます。なかには漢方治療でないと改善をみなかったであろう患者さんもおられます。本日はペインクリニック領域で漢方治療が奏効した印象に残る症例を紹介させていただきます。

症例は 74 歳、男性で、身長 170 ㎝，体重 60 ㎏のやややせ型の方でした。
3 年前の暮れ頃より右肩・背部・側腹部にジワ～ッとした持続痛が出現し、近くの整形外科・消化器内科で血液検査・画像検査・内視鏡検査含め精査するも異常所見認めず，約半年後の 5 月に右季肋部痛を主訴に当科を受診しました。右側上位および中位胸椎傍脊柱部や腰椎傍脊柱部のいわゆる椎間関節に相当する部位に圧痛を多数認めました。胸椎単純Ｘ線・腹部 CT・消化管内視鏡などの各種検査では異常所見は認めませんでした。加齢に伴う脊椎の変形により骨棘が形成され、それが胸部の神経根を刺激するといわゆる「肋間神経痛」のような痛みが生じるわけですが、そのようなケースでも傍脊柱部に圧痛を認めることがあり、圧痛部へトリガーポイント注射を行いますと疼痛の改善が得られることがあります。しかしながら、この患者さんは、トリガーポイント注射は有効ではありませんでした。原因が脊椎ではないと考え、プレガバリンなどの薬物療法も効果ないであろうと判断しました。西洋医学的アプローチがうまく行かない時、私は違う角度から痛みを考えるために東洋医学的な

アプローチを行います。この患者さんの東洋医学的所見ですが、望診ではやや痩せ型，顔色良好でした。舌診では舌は淡紅色で白苔を認めました。問診では食欲はあり、便通異常もないとのことでしたが、若い頃より胃腸が弱く、寒くなるとおならが多く、手指が白くなりジリジリとした痺れ感を感じるとの事でした。切診では、脈は浮で虚実中間、おなかは腹力3/5，両側胸脇苦満・心下痞鞕・両側腹直筋攣急・右鼠径部の圧痛を認めました。手指の他覚的冷えは軽度で、手掌発汗も軽度認めました。

右肩・背部・側腹部の持続痛，両側手指の冷え・ジリジリとした痺れ感を、大塚敬節先生が命名した「疝気症候群 A」と診断し、当帰四逆加呉茱萸生姜湯エキス 7.5g/日に修治ブシ末 1.5g/日を加え処方しました。「今年の冬は手指の冷えがいつもに比べ酷くない」と患者さんがおっしゃるほど、一時的に症状の改善を認めていましたが、寒さが厳しくなってくるに従い両側季肋部痛が悪化し、おならが多くなるなど腹部症状の変化もみられてきた為、当帰四逆加呉茱萸生姜湯エキスを当帰湯エキス 7.5g/日に変方しました。当帰湯エキスに変方後、両側季肋部痛は徐々に軽減し 2 週間後にはほぼ認めなくなりました。以後、寒くなってくると同様の症状が出現増悪してくる為、当帰湯エキスをその都度処方しています。

冷えにより悪化した腹部症状や痛みの部位を考慮し、温裏薬を転方する事により、痛み軽減をみました。例年に比べ今年の冬は手指の冷えが酷くないと患者さんも自覚し、四肢の冷えは改善し季肋部痛も一時期改善が認められていた事より、本症例の諸症状の改善に当帰四逆加呉茱萸生姜湯エキスは有効であったと思われました。外気温の更なる低下により、当帰四逆加呉茱萸生姜湯エキス投与にもかかわらず季肋部痛が悪化しましたが、当帰湯エキスに変方し速やかに症状の改善をみました。今回使用した当帰湯は、出典は孫思邈著『千金方』であり、「心腹絞痛シ，諸虚冷気満チテ痛ム者ヲ治ス」と記されています。当帰湯の構成生薬は当帰、半夏、桂皮、厚朴、芍薬、人参、黄耆、山椒、甘草および乾姜の 10 味より成り、大建中湯を構成している乾姜、人参、山椒、これに当帰が加わることで身体を温め、腹部ガスの排出促進をもたらします。次に桂皮、半夏および厚朴などの気剤により気の鬱滞を取り除き、さらに甘草、芍薬の鎮痙、筋弛緩作用により疼痛軽減がもたらされます。大塚恭男先生によれば、「当帰湯の適用目標は、比較的体力が低下し、四肢冷感を訴える人の胸腹部から背部にかけての持続性鈍痛あるいは発作性の疼痛を目標に用い、腹部は特定の所見は少ないが、腹壁の緊張が弱く、腹部膨満感、鼓音を認めることがある」とされています。また一般に、背部の冷感、腹部膨満感、腹痛、胸痛、背部痛、鼓脹、放屁などを伴い、これらの症状はしばしば心因、寒冷によって誘発・増強される、と述べられています。これまでにも、種々の胸背部の痛みに有効であったと報告されています。また当帰四逆加呉茱萸生姜湯は、出典は張仲景　著『傷寒論』であり、「手足厥寒，脉細ク絶エント欲スル者ハ当帰四逆湯之ヲ主ル．若シ，其ノ人内ニ久寒有レバ，当帰四逆加呉茱萸生姜湯ニ宜シ」と記されています。高山先生によれば、「血虚がある者が寒冷により，末梢循環特に四肢に動脈性の血行障害を起し，それが腹腔内の血管に迄影響を

及ぼして，四肢の厥冷と，腹痛・嘔吐などを起こして来た者に用いる方剤である」とされています。冷え症や凍創のみならず、古人が「疝」と呼んだ病態に用いられます。今回の症例でも当帰四逆加呉茱萸生姜湯エキス投与により手指の冷えが例年に比べ改善し、一時的ではあっても季肋部痛なども軽減していたので、当帰四逆加呉茱萸生姜湯エキスも冷えにより誘発された様々な症状の改善に有効であると思われました。当帰湯は構成生薬から人参湯・大建中湯の方意を含み、当帰四逆加呉茱萸生姜湯よりも裏寒に対する改善作用がより強いと思われます。冷えに伴う体幹部の痛みに対して、当帰四逆加呉茱萸生姜湯が無効な場合には、当帰湯も考慮すべきと思われます。はたして、この患者さんの季肋部痛の原因は何であったのか？ 広範囲にわたる傍脊柱部の圧痛の存在より傍脊柱部の皮下組織や筋肉に血行障害が生じていたのだろうか？ 季肋部痛と腹部症状が連動していたことより腸管蠕動異常が原因であろうか？ いずれにしても当帰湯は裏の冷えを改善することにより、季肋部痛の原因となっていたものを改善したのである。

　このように寒冷刺激が痛みを悪化させたり、痛みそのものの原因になっていたりする事がある。そのような時こそ漢方の出番であると、この症例を通して痛感させられました。

１）白藤達雄：当帰湯②基礎と臨床．日本病院薬剤師会雑誌 17：73－74，1999
２）恩田芳和：当帰湯が著効を示した背・胸部痛の１例．痛みと漢方 7：46－48，1997
３）小林永治：不定愁訴に近い疼痛に対する当帰湯の効果．漢方の臨床 59：1599－1604，2012
４）竹内健二，角山倫子,伊佐田哲朗，他：冷えにより生じたと思われる季肋部痛に当帰湯が奏効した１症例．痛みと漢方 23：107-109，2013
５）大塚恭男：当帰湯①処方解説．日本病院薬剤師会雑誌 17：71－72，1999
６）高山宏世編著：当帰四逆加呉茱萸生姜湯．漢方常用処方解説，三考塾，東京，2005.